

外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書16

梅林遺跡4

—第6次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第739集

2003年

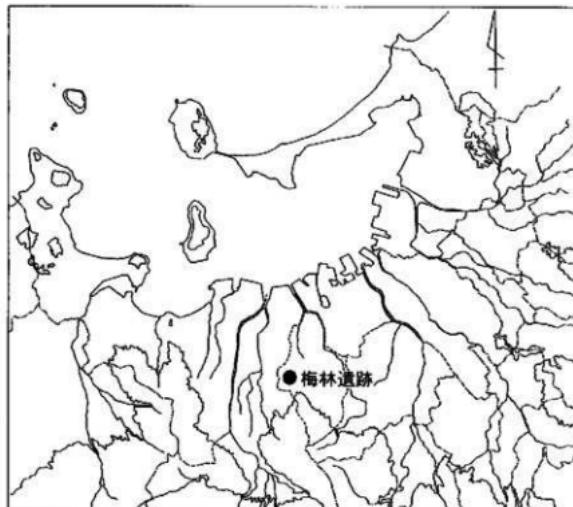
福岡市教育委員会

外環状道路関係文化財発掘調査報告書16

梅林遺跡4

—第6次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第739集



梅林遺跡6次

調査番号0132

遺跡番号UBY-6

2003年

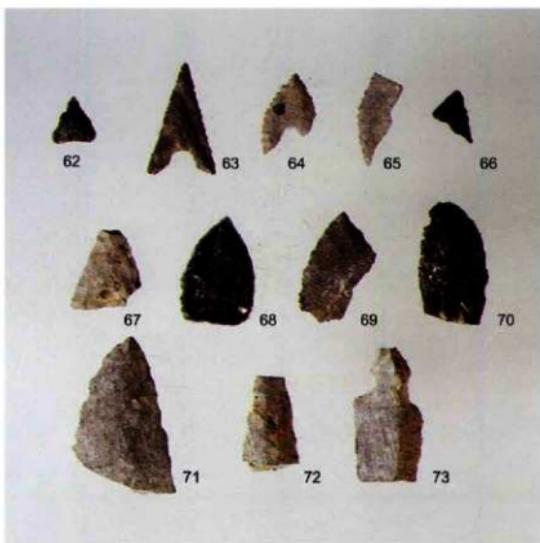
福岡市教育委員会



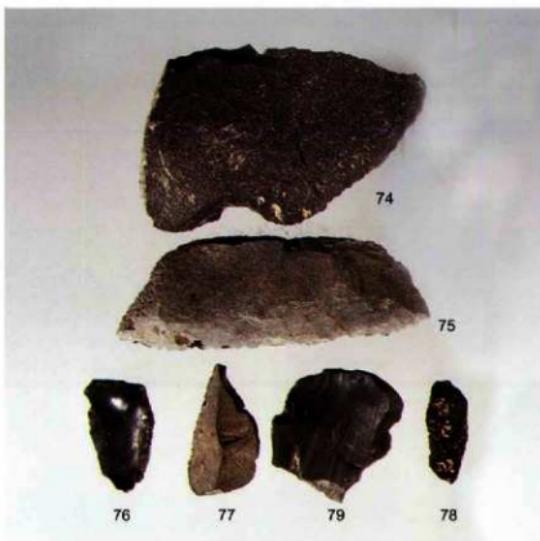
(1) 調査区全景（西から）



(2) SC01（東から）



(1) 出土石器1



(2) 出土石器2

序

現在建設中の地下鉄3号線は、年々深刻化しつつある西部地区の交通問題の解消に期待され、その早急な開通が望まれています。

本書は、地下鉄3号線3出入り口建設工事に先だって行われました梅林遺跡第6次調査の成果について報告するものです。今回の調査では、古墳時代の住居跡をはじめとして、旧石器時代、縄文時代等の遺構、遺物を確認し、地域における歴史を考える上での重要な手がかりを得ることができました。

本書が、市民の皆様の埋蔵文化財、ひいては地域の歴史に対する理解の一助となり、また考古学上、地域史上の研究資料として御活用戴ければ幸いです。

最後になりましたが、以上の調査において、国土交通省福岡国道工事事務所、福岡北九州高速道路公社、福岡市交通局、ならびに地元の方々を始めとする関係者各位に厚く御礼申しあげます。

平成15年3月14日

福岡市教育委員会
教育長 生田 征生

本文目次

Iはじめに	
1.調査に至る経緯	1
2.調査の組織	1
II遺跡の立地とこれまでの調査	1
III調査の記録	5
1.調査の概要	5
2.住居跡	6
3.包含層出土遺物	11
(1)上部包含層	11
(2)下部包含層	12
IVおわりに	15

挿図目次

Fig. 1 周辺の遺跡(1/2500)	2	Fig. 8 SC 02 出土遺物実測図(1/3)	8
Fig. 2 梅林遺跡調査地点(1/4000)	2	Fig. 9 SC 03 実測図(1/60)	9
Fig. 3 調査区位置図(1/600)	3	Fig. 10 SC 03 出土遺物実測図(1/3)	10
Fig. 4 遺構配置図(1/200)	4	Fig. 11 包含層出土遺物実測図 1 (1/3)	11
Fig. 5 SC 01 実測図(1/60)	5	Fig. 12 下部包含層出土状況(1/50)	12
Fig. 6 SC 01 出土遺物実測図(1/3)	6	Fig. 13 包含層出土遺物実測図 2 (2/3, 1/2)	13
Fig. 7 SC 02 実測図(1/60)	7		

例言

- 1.本書は地下鉄3号線2出入り口建設に伴い平成13年10月12日から同年11月2日に発掘調査を実施した梅林遺跡第6次調査の報告である。
- 2.本書に使用した方位は磁北で、座標北から $6^{\circ} 21'$ 西偏する。
- 3.本書に使用した遺構の実測は担当者、遺物の実測は井上加世子および担当者、挿図の製図は井上と担当者、写真撮影は担当者が行った。
- 4.本書の作成にあたり上田保子、前田みゆき、下田尚美の協力を得た。
- 5.本章の執筆、編集は担当者が行った。
- 6.本書に係わる図面、写真、遺物はすべて福岡市埋蔵文化財センターに収蔵保管される予定である。

梅林遺跡第6次

遺跡調査番号	0132		遺跡略号	UBY-6
地番	城南区梅林4丁目451-10.11		分布地図記号	七隈74
開発面積	450m ²	調査対象面積	450m ²	調査面積 368m ²
調査期間	2001.10.12~2001.11.2			

Iはじめに

1.調査に至る経緯

福岡市教育委員会では、福岡市域内を東西に横断する形で計画されている一般国道202号福岡外環状道路予定地内の埋蔵文化財について、平成3年度より試掘調査および発掘調査を進めている。

その間、福岡市交通局は、中央区および西部地区の交通問題の解消のために、地下鉄3号線建設を築港より西区橋本まで延長させることを決定した。これを受けて本市教育委員会は平成8年度より試掘調査および発掘調査を行っている。これらの事業は路線が重なっている部分が多く、発掘調査は両事業を原因として行われている地点もある。

今回の調査地点は地下鉄3号線2出入口建設の計画に伴って実施した。当該地は外環状線第III工区の南側に接し、北側の隣地は平成11年に梅林遺跡第4次調査として発掘調査が行われ、すでに地下鉄、外環状線建設工事が行われている箇所である。第4次調査の状況から、当該地に遺跡が広がることは明らかであるため、福岡市交通局と教育委員会の間で協議を行い、両者の間で受託契約を締結し発掘調査の実施に至った。調査は平成13年10月12日から同年11月2日まで368m²について行った。この間、福岡市交通局、福岡国道工事事務所、福岡市土木局、工事施工業者の方々には様々なご協力をいただいた。

2.調査の組織

調査委託 福岡市交通局

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 文化財部埋蔵文化財課 課長 山崎純男 第1係長 山口謙治

事前審査 埋蔵文化財課 事前審査係長 田中寿夫 滝本正志

庶務担当 宮川英彦

調査担当 池田祐司

調査作業 井上八郎 井上ムツ子 井上忠久 永島重俊 広瀬梓 欠野和江 吉川春美

II遺跡の立地とこれまでの調査

油山から北方向に派生する丘陵は、河川による解析でいくつもの小丘陵に分かれる。梅林遺跡はそれらの丘陵のうち、梅林から飯倉と連なる丘陵と、金山へと連なる丘陵に挟まれた狭い谷状平野の最深部に位置し、谷の中央には七隈川が流れる。これまで西側の丘陵上には飯倉F、G遺跡と干隈古墳群C、D、F群が広がり、東側の丘陵には干隈古墳群A群が知られていた。梅林遺跡はその状況は知られていなかったが、5次にわたる外環状線道路建設に伴う発掘調査(Fig. 2)が行われ、その様相が次第に明らかになってきている。

今回の6次調査地点と同様に西側丘陵の東斜面に位置する第2次、第4次調査(Fig. 3)では、縄文時代の落とし穴、埋甕、古墳時代後期の竪穴住居跡、古代の掘立柱建物等の遺構が確認されている。このうち、古墳時代の住居跡は、カマドに連結する壁溝に特徴を持つものがあるなど注目すべき点がある。七隈川東岸で行われた1次調査では、古墳時代の竪穴住居2棟、掘立柱建物2~4棟等の遺構が密に確認されている。同じく3次調査では古墳時代から江戸時代までの4面の水出跡を検出し、集落と生業の関わりを考える上で大きな成果をあげている。以上のように谷を挟んだ両岸において古墳時代の住居跡が確認され、狭い谷の周りに形成された集落の景観がその生業形態を視野にいたところで明かになりつつある。今回の調査地点は、さらに広がりが予想される古墳時代集落域の一端に位置する。



1.梅林遺跡 2.七隈古墳群C群 3.飯倉G遺跡 4.梅林古墳 5.七隈古墳群A群 6.飯倉D遺跡 7.七隈古墳群B群
8.千隈遺跡 9.野芥遺跡 10.鶴町遺跡 11.免道跡 12.次郎丸高石遺跡 13.野芥遺跡 14.エゾノ道路 15.田村遺跡

Fig.1 周辺の遺跡 (1/25000)

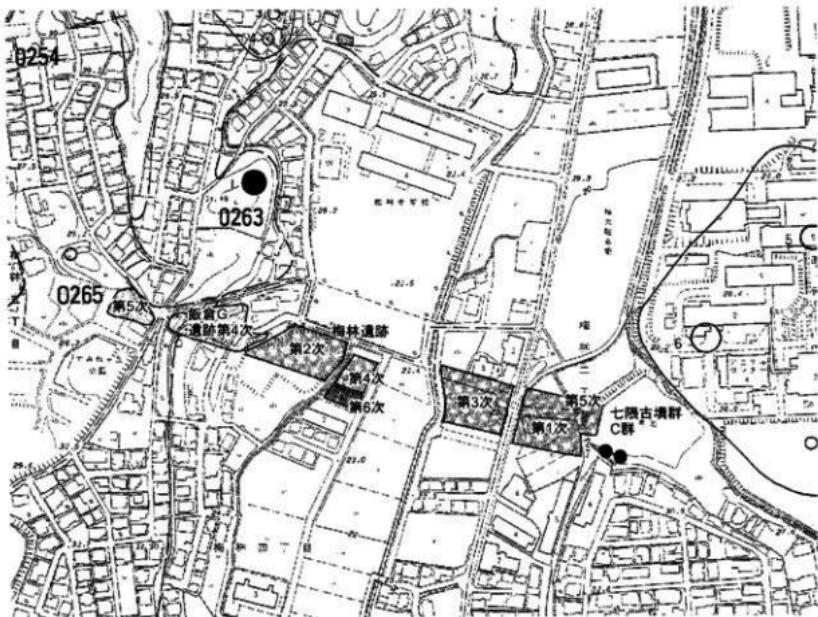


Fig.2 梅林遺跡調査地点 (1/4000)

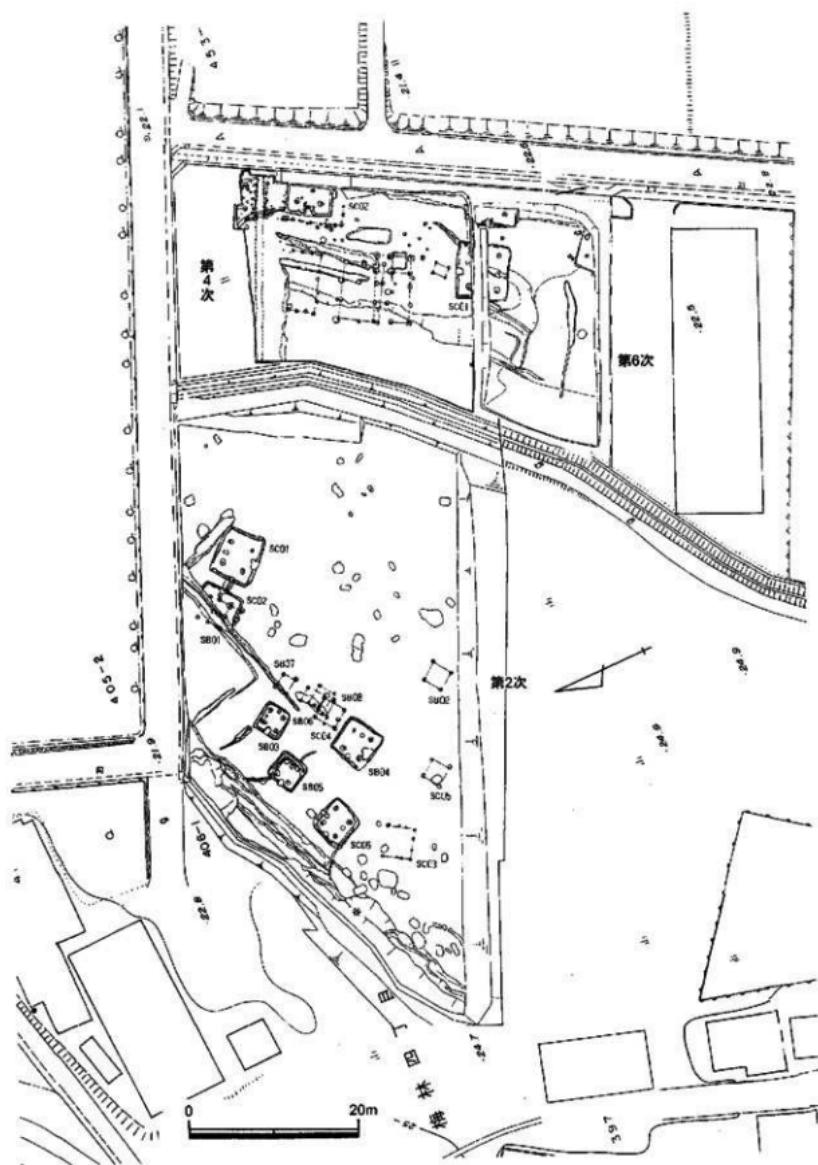


Fig.3 梅林遺跡第2.4.6次調査区位置図 (1/600)

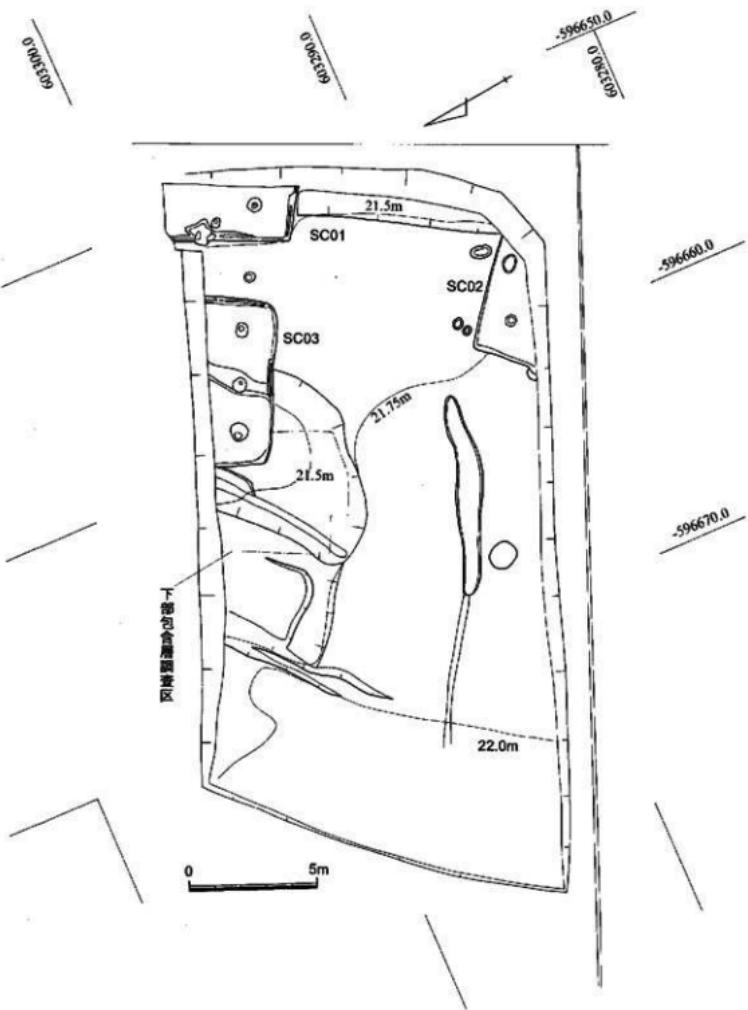


Fig.4 遺構配置図 (1/200)

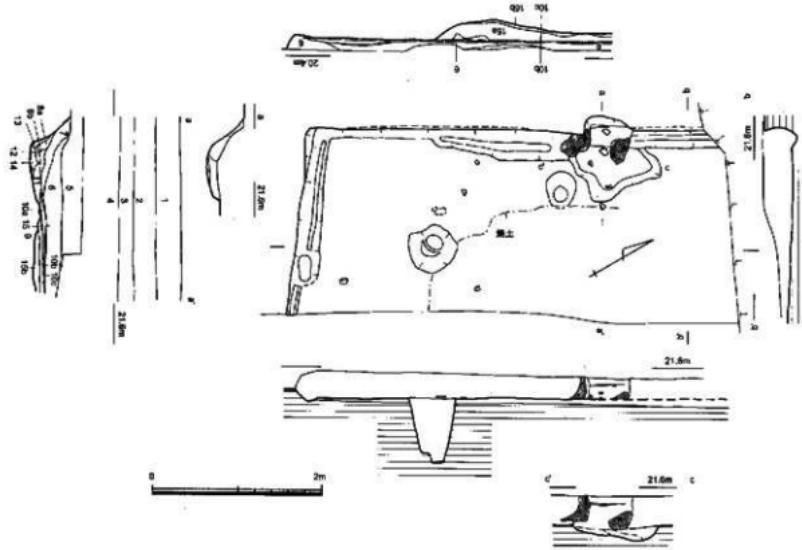
III 調査の記録

1. 調査の概要

調査地点は丘陵から東側の谷に張り出す舌状台地上に位置する。付近は耕地整備により段状の造成を受けている。調査区は、水田に客土造成した更地であった。北側は第4次調査地点ですでに矢板を打っての地下鉄等の工事が行われ、今回の調査区の際まで掘削が行われていた。西側も工事による造成が行われ2.5mほど高い。東側は道路で現状では調査区とほぼ同じレベルで、その東は大きく落ちる。南側は共同住宅である。現況での標高22.6mを測る。

客土、旧耕作土を除去した面で遺構を確認した。遺構面は西側の丘陵側は削平が大きく、頁岩の風化土が露出し、近現代の耕作痕、耕地の段差以外は検出できなかった。中央から東側は、ローム状の粘質土と黄茶色の砂質上で一部黄褐色粘土の遺物包含層が5cm前後の厚さで広がる。東端は大きな段落ちとなりさらに東側の水路につながると考えられる。遺構面は東に向かって傾斜し、西端で標高21.2m、東端の段落ち際で21.6mを測り、0.6mの標高差がある。

検出した遺構は古墳時代の住居跡3棟で、いずれも調査区外に広がり確認できたのは一部である。このうちSC03は第4次調査のSC01と同一のものと考えられる。このほか、近現代の耕作に伴うと考えられる溝、土坑を確認した。遺物包含層は遺構を覆うものから古代を中心とした遺物、旧石器時代の石器が出土し、遺構面が乗るロームの再堆積層からは繩文時代早期のものと考えられる石器が出土した。以下、遺構、包含層の順で報告する。



2. 住居跡

SC 01 (Fig.5)

調査区の北東隅で検出した。方形プランを呈すと考えられる。北側を一部拡張し1.2mほど遺構の延長を確認したが、その先は工事による削平により失われていた。また、調査区東側の段落ちによって切られるため、西側の壁が30cmほど残存するのに対し、東側は5cmほどしか残っていない。

西側の壁際にはカマドを設け、20cm弱ほどの張り出しがある。このカマドが住居の中央と仮定すると、東西長約7mが復元できる。また、やや南よりには径58cm、深さ70cmほどの主柱穴と考えられるピットを検出した。第2、4次調査検出の住居跡と同様に4本柱と考えられ、南北の柱間隔4mが推定される。

覆土はFig.5の6層の灰茶褐色土以下である。6層は住居廃絶後の堆積、7、8層は粘質で焼土を多く含む土でカマドの崩落土と推定される。9層はしまりのない赤褐色の焼土でカマド前面に幅2mほどの範囲に広がる。10a層は厚さ3cmほどの炭層で9層より東にややすれて広がる。9層とともにカマド使用時のものと考えられる。10c層は炭を多く含む砂質土でよく締まり硬化している。この硬化面は床全面に広がり、生活面と考えられる。11から14層はカマドの本体および崩壊土と考えられる。15層は貼り床と考えたが、しまりがない。

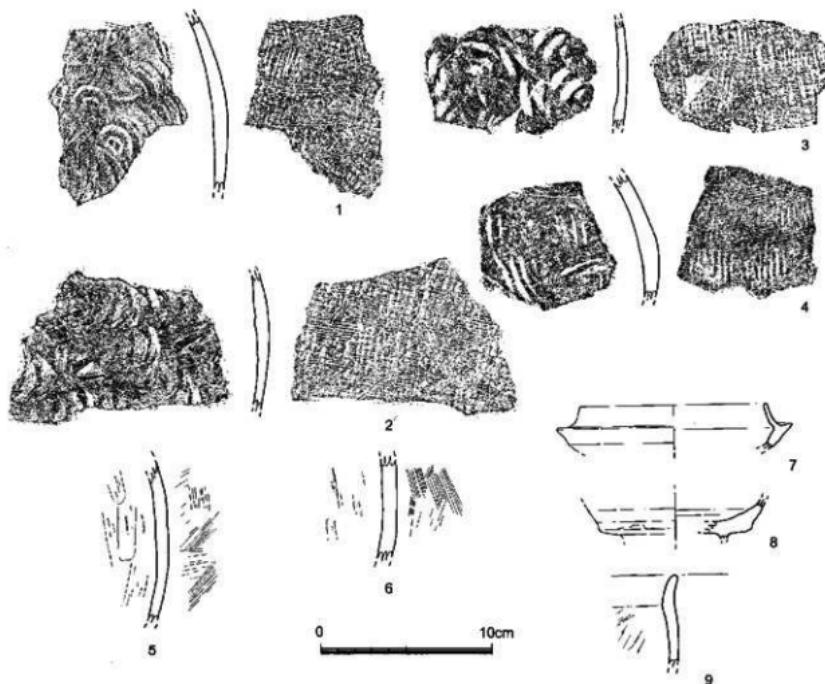


Fig.6 SC 01 出土遺物実測図(1/3)

カマドは張り出し部の両側に、わずかに赤変した粘質土による袖状の突出が見られるが残りは悪い。前面には浅い不整形のくぼみがあり、先述の11から14層が堆積する。堅く焼成を受けた面、支石等は確認できなかった。

壁際には周溝が見られ全周すると推定される。残りのよい西壁では壁面がオーバーハングしている。

出土遺物 (Fig.6)

遺物は全体に少ない。床面近くとカマド付近で比較的多く出土した。

1, 2はカマド前のくぼみ状の焼土混じり土から出土した甕の破片で同一個体と考えられる。外面上は平行叩きの後に挫き目を施す。内面は當て具痕が明瞭に残り、軽いながら一部見られる。色調は淡橙色から淡茶色を呈し、焼きは堅く、3mm大までの砂粒を含む。外面には若干の煤が見られる。器面はなめらかな質感である。生焼けの須恵器と考えられる。3, 4は床面直上で出土した土器で、1, 2と同様生焼けの須恵器片である。3は1, 2と同一個体の可能性が高い。4は調整等は同様であるが、器面の質感と色調が異なる。埋没土壤、器面粗れによる外見の違いとも考えられ、別個体とも判断できない。5, 6は土師器の甕で外面は刷毛目調整、内面は削り調整を施す。外面灰褐色、内面淡橙色を呈し、4mm大までの砂粒を多く含む。7から9は覆土からの出土である。7は須恵器の杯で口径1cmを復元したが小片のため不確かである。8は須恵器で厚手だが高台付の壺と考えられる。1/4弱からの復元である。4mm大までの砂粒を多く含む。9は土師器の甕で小型になると想われる。外面は2次調整によると考えられる暗い橙色を、内面は暗茶褐色を呈す。外面は調整不明、内面は削りである。

SC 02 (Fig.7)

調査区の南東端で検出した。平面プランは方形と考えられるが、大半は調査区外に拡がり未確認である。西側の壁では調査区際部分に張り出しがある。これがカマドに作うもので中央にあると仮定

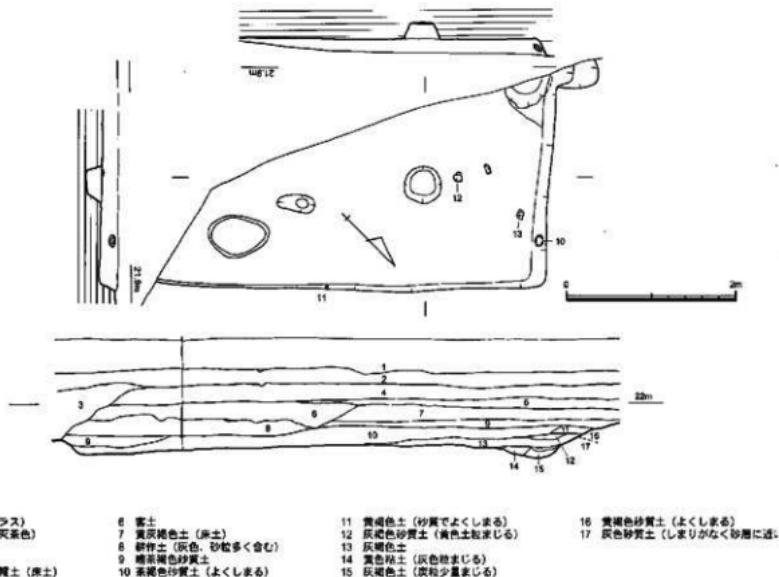


Fig.7 SC 02 実測図(1/60)

すると、南北長約5mが復元できる。壁は約25cmが残存する。覆土は10層が茶褐色上の砂質土で周辺の土壤に似ている。この周辺にはローム土壌は広がっていない。床面の硬化面は確認できなかった。南西隅には張り出しがあり、その前面には浅いくぼみが見られる。この状況はSC 01と同様でカマドを想定すべき状況であるが、焼土は見られない。ただ、14層に炭混じりの黄色粘土が見られ、15層は炭ブロックが混じる灰色の粘質土でカマドの可能性がある。主柱穴と考えられピットを1つ検出したが、断面に示したように深さ20cmと浅めである。また、壁溝は確認できなかった。

出土遺物(Fig.8)

遺物は東側と北側の壁沿いに須恵器の杯、床付近で土師器片が出土した。覆土からは少ない。

10は西側の壁際で10cmほど浮いた状態で出土した須恵器の杯身の完形品である。口径12.0cmを測る。外面は焼成後の粗れが見られ、返り部も一部わずかに欠けている。外面は回転なでおよび回転へら削り、内面はなで調整が見られる。淡い灰色を呈し細砂粒を含む。受け部の根元には重ね焼きによる相手方の胎土が若干残る。11は北側の壁際で出土した須恵器の杯身で口縁部の1/2強が欠ける。復元口径12.9cmを測る。外面は回転なので後、回転へら削り、内面には當て具痕が残る。やや暗い灰褐色を呈し、胎土には細砂粒を多く含む。12は床直上で出土した土師器の裏片で底部近くと考え復元図化した。外面刷毛目調整、内面削り調整を施す。2mm大の砂粒を含むが胎土は細かい。明茶色から橙色を呈し、焼きは堅い。13は床直上で出土した土師器の裏の口縁部で、外面は刷毛目調整の後に強い横なでを施し、内面は弱い削りと横なでが見られる。3mm大までの砂粒を含み淡橙色から橙色を呈す。焼きは堅い。15から18は覆土中の出上である。15は須恵器で壺等の底部として図化したが回転へら削りが残り、杯の可能性がある。内面は回転なので、外面は回転へら削りの後になでを施す。16は繩文土器の口縁部で口唇部に斜め方向に刻み目を密に施し、口縁部外面には横方向の深い凹線で文様を施す。この小片では口縁部直下に若干方向を違えた2つの凹線が重ならず接し、その下に2本の凹線が見られる。淡灰茶色を呈し、細砂粒を含む。滑石は含まない。焼きは堅い。17は陶器の底部でスリ鉢と考えられる。18は断面台形の柱状の花崗岩のレキで、先端部に敲打痕が見られ、叩き石としての使用が想定される。遺構の時期は10、11の須恵器が近いものと考えられ、6世紀後半が想定される。

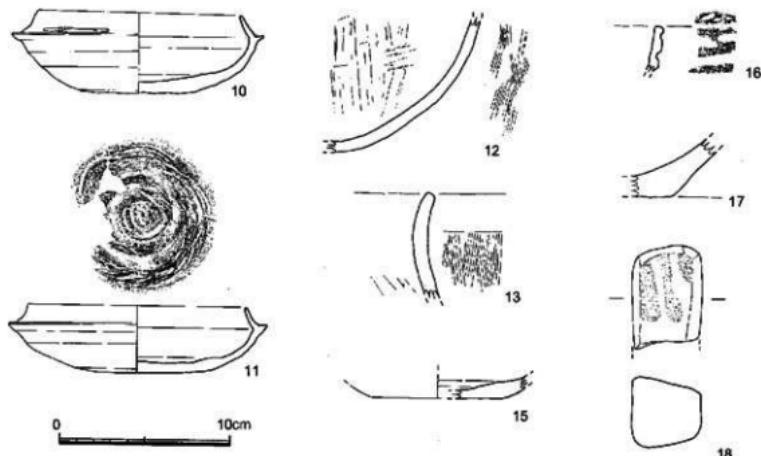


Fig.8 SC 02 出土遺物実測図(1/3)

SC 03 (Fig.9)

調査区北側中央部で検出した。方形プランを呈し東西長6.8mを測る。4次調査のSC 01と同一のものと考えられる。覆土は土層図の8層で黄褐色の粘質土でよくしまる。床面は若干の硬化が見られた。土層図に見られるように、床面は、ほぼ中央部の若干の段差を伴う傾斜部を境に、東西で約2.5cmほどのレベル差がある。住居跡覆土よりも上の3層の耕作土においてもこの傾斜が見られる。従って、この傾斜は水田を埋め立てた後、おそらくは4次調査区部分の工事に伴い地下水の変化等の影響で起きたものと考えられる。全体図 (Fig.4) で見れば、SC 03の西半から南側に広がるくぼみ状がこれに伴うものと考えられる。住居後の床面下の上層に日を向けると、9層の貼り床の下は傾斜部を境に東側がよく締まった砂質土 (12層)、西側が粘質土 (13層) という違いがあり、この差が一つの原因であろう。東側半分は床面直上まで削平が及んでおり、検出面が床面であった。硬化面も確認したが、上部の水田の影響で鉄分等が沈着したものと判断して掘削を行い、結果として9層部分を掘りすぎてしまった。

床面(9層上面)では3つのピットを確認した。SP 1, 3が主柱穴と考えられ、4本柱が復元できる。SP 1は径6.0cm、深さ7.5cm、SP 2は径7.0cm、深さ6.5cmを測る。SP 2は形状、深さが他の二つと異なる。壁溝は東西壁では幅2.0cm弱の明瞭な溝が確認できたが、南側は途切れる。西半は先述の落ちの影響で確認しにくくなっている可能性もある。床土と考えている9層下の西側壁寄りに、径5.0cmほどの範囲に厚さ5mmほどの炭が広がる。この状況の性格は不明だが、貼り床を行う前に、生活面があった可能性も考えられる。

図示した土層のうち1、2層は近年の客土、3層は圃場整備後の水田耕作土、4層は圃場整備時の客土、5層はそれ以前の水田耕作土の残骸と想定している。

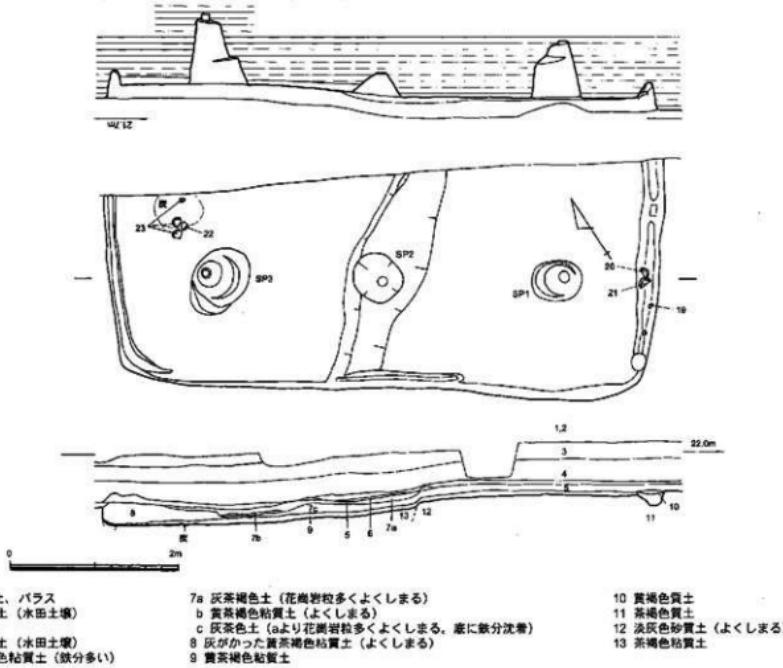


Fig.9 SC 03実測図(1/60)

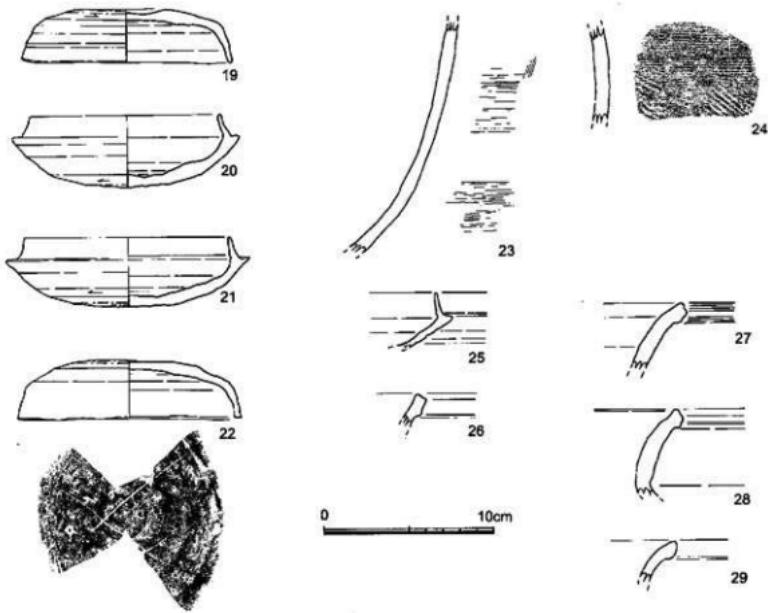


Fig.10 SC 03出土遺物実測図(1/3)

出土遺物 (Fig.10)

遺物は少ないが、壁溝、ピット、覆土から若干の遺物が出土している。

19から21は東壁際の壁溝から出土した須恵器である。19は杯蓋で西半の覆土上層から出土した破片と接合した。器体はゆがんでいる。口径12.7cmを測る。外面回転なのでのち回転へら削り、内面は回転なで調整である。灰褐色を呈し、2mm大までの砂粒を含み1mm弱のものを多く含む。20、21は生焼けの杯身である。いずれも外面回転なのでのち回転へら削り、内面は20は回転なで、21はなで調整を施す。2mm大までの砂粒を多く含み、20は橙色、21は灰橙色を呈す。20は約1/2が残存し、口径11.2cm、21は1/2強が残存し、口径12.0cmを測る。22は須恵器の杯蓋でSP2出土の破片と覆土の土器が接合した。歪んでおり正確ではないが、口径13.3cmを測る。23から29は覆土出土の遺物である。23は西側の覆土中に比較的集まって出土した土師器の甕片が接合した。傾きは不明である。外面は刷毛目調整、内面は粗れのため不明で、2mm大までの砂粒を多く含む。24は生焼けの須恵器と考えられる。外面は搔き目調整の後に叩きを施し、内面はなで状である。橙色を呈す。25は須恵器の杯身片で淡灰色を呈す。26は須恵器の甕の口縁部で淡灰色を呈す。

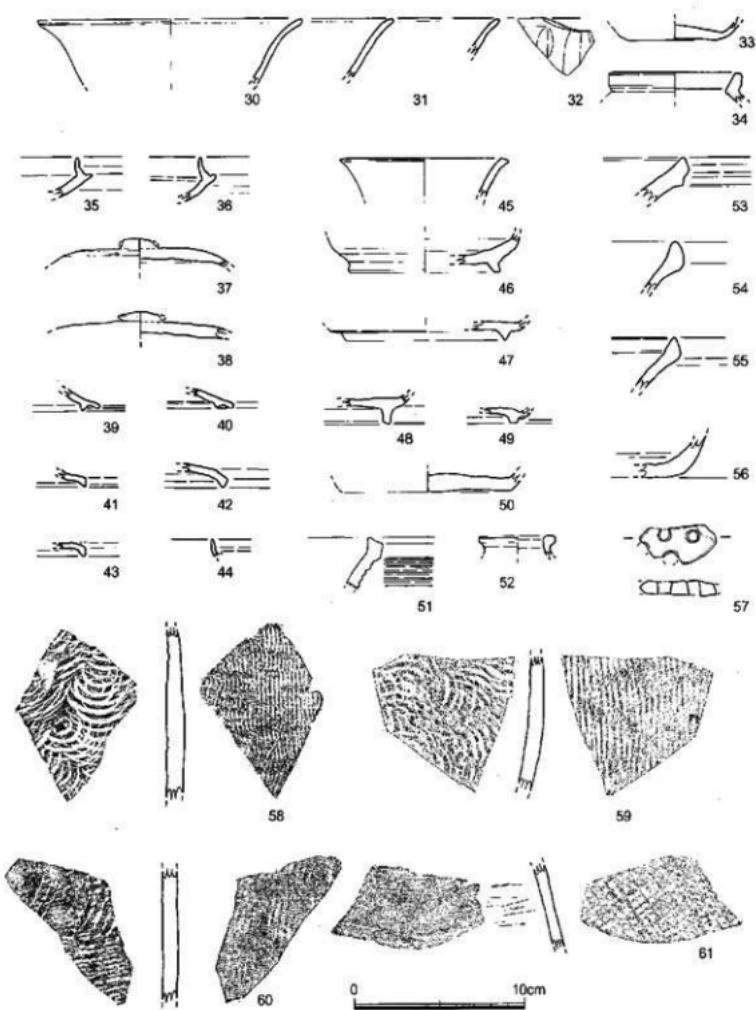


Fig.11 包含層出土遺物実測図1(1/3)

27から29はいずれも生焼けの須恵器で甕の口縁部である。淡橙色を呈し、細砂粒を多く含む。このほかSP1から8.3gの鉄滓が出土した。また黒曜石片が西半を中心に出土した。下部包含層の項で報告する。

3.包含層出土遺物

(1) 上部包含層 (Fig.11)

遺構検出面上には、調査区の東側約半分に古代の遺物を中心に、中世までの遺物が出土する遺物包含層が広がる。これを上部包含層としておく。この包含層は黄褐色のやや粘質の土で、灰色の砂質土をブロック上に含む。この灰色砂質土は旧耕作土に近く、昭和の圃場整備以前の水田造成時の客土ではないかと考えている。そうであれば、周囲に同時期の生活跡が存在していたものと考えられる。なお黒曜石については下部包含層の遺物と一緒に報告する。

30から33は磁器である。30、31は口剥げの白磁碗の小片である。32は青磁碗で鍋連弁文が施され、オリーブ色を呈す。33は白磁皿の底部である。34は陶器の瓶の口縁部で暗灰色を呈す。35から56は須恵器である。35、36はⅢb期の杯身である。37、38は杯蓋の天井部でつまみが付く。38は砂粒が多く含み、つまみ部の一部が欠ける。39から43は杯蓋の小片である。44は短頸壺の口縁部である。45は壺の口縁部で1/4弱からの復元口径1.0cmを測る。46から49は高台付き杯の口縁部である。50は瓶等の底部で外面に擦痕が見られる。51は外面口縁下に4本の顯著な沈線を施す。52は陶器の瓶の口縁部である。1/6からの復元口径4.6cmを測る。53から55は壺の口縁部である。53は口唇端部がシャープであるに対し、他は丸みを帯びる。56は壺の底部で器面があれています。57は土師質の壺の底の部分で径8mmの穿孔が焼成前に行われている。破片では4つの穴が確認できる。58から61は須恵器の壺の胴部である。58、59は外面平行叩きで内面には同心円状の当て具痕が明瞭に残る。60は外面平行叩きの後に部分的に搔き目を施し、内面の当て具痕は直線的で若干のなでを施す。61は外面は格子目叩き、内面は堅い工具で削っている。この他に鉄滓1300gが出土している。19頁、82、83、84に一部示した。

(2) 下部包含層 (Fig.12,13)

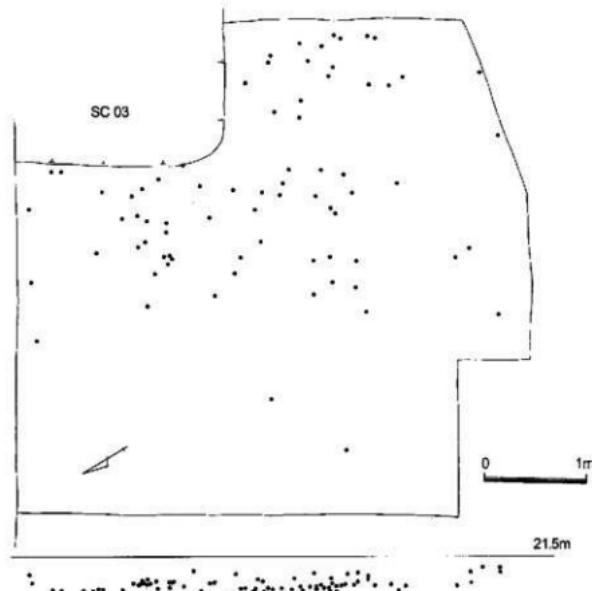


Fig.12 下部包含層遺物出土状況(1/50)

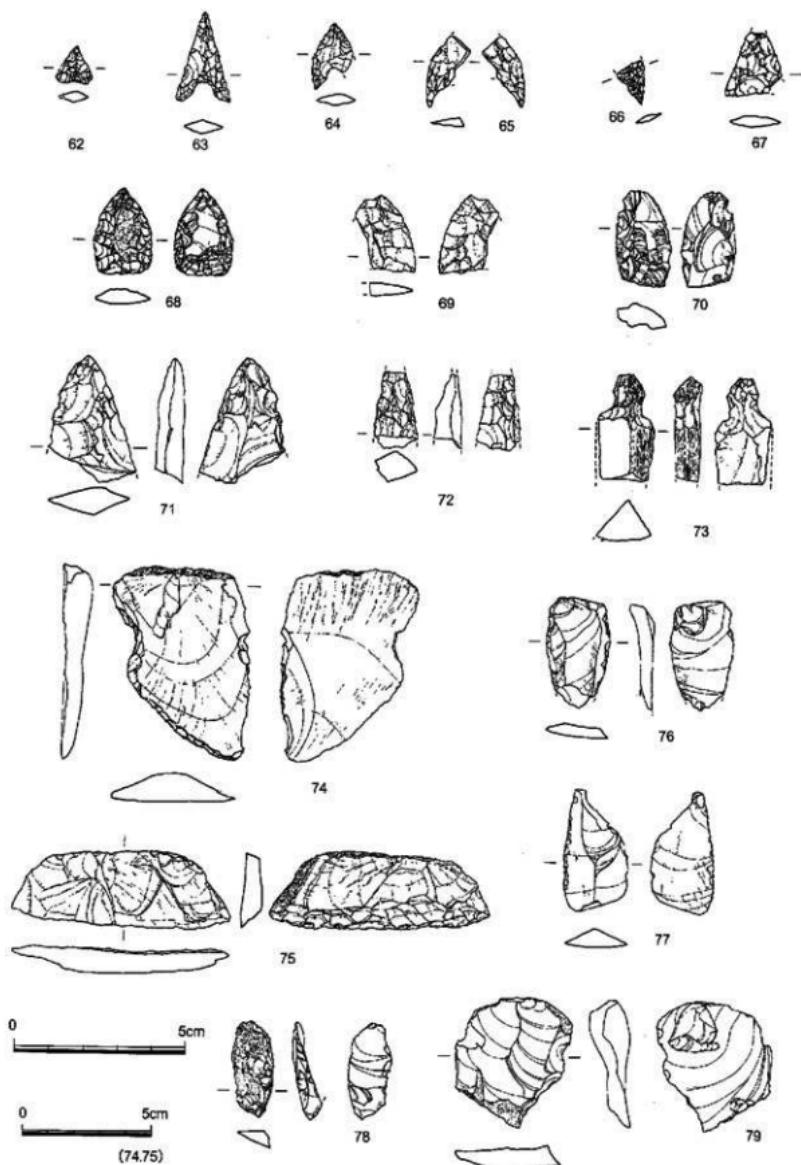


Fig.13 包含层出土遗物实测图2(2/3、1/2)

S C 0 3 の西側から南側にくぼみ状の地形が見られ、この部分の土壤が黄褐色粘質土で造構検出時より、黒曜石等の遺物が見られた。また、上部包含層で旧石器時代のものと考えられる石器が出土していることから掘削を行い、遺物の出土位置の記録を行った。その結果、一部明らかに紛れ込みと判断できる上器を除くと、石鎌、スクレーパー等の縄文時代の石器を中心に出上した。出土状態はFig.12写真(11)に示した。特に集中した様子はない。また、上部包含層、S C 0 3 からも石器が出土しており、本来的には下部包含層に含まれていたものと考えられるため、一緒に報告する。出土位置については表に示す。

6 2 から 6 9 は石鎌で 6 2, 6 6, 6 8 は黒曜石製、他は安山岩製である。6 2 は平面三角形の小型鎌で断面は厚みがある。6 3 は長身で深い抉りが入る。丁寧な調整剥離を施す。6 4 は深めの抉りを持ち、中央部に主剥離面を残す。裏面は中央部が突起気味を呈す。4 5 は多くを欠損するが 6 4 に近い形態と考えられ、主剥離面を残す。欠損は古い。6 6 も 6 4 に近い形態を持つと考えられる。細かな調整剥離を全面に施す。6 7 は三角形を呈し、薄く仕上げる。頂部を古い欠損で失うが、基部の欠損は新しい。6 8 は細かな調整剥離を丁寧に施す。主剥離面を残し、裏面には自然面が残る。厚手である。6 9 は薄手の三角形を呈し、大振りの調整剥離で仕上げる。頂部、基部の欠損は古い。石材は細かな気泡が多く粗い。7 0 は黒曜石製の石鎌未製品と考えられる。7 1, 7 2 は安山岩製の尖頭器である。7 1 は大振りの調整で成形する。7 2 は断面菱形で厚い。7 3 は自然面を残す断面三角形の剥片に、石匙状の抉りを両面から施す。側面は新しい欠損により、調整剥離の有無は不明だが、現状では抉り部以外に調整剥離は見られない。7 4 は縦長剥片を利用したスクレーパーで、2 側辺に互いに異なる片側からの調整剥離を施し刃部を形成している。主剥離面側の刃部は角度がやや急で様器状を呈す。またその基部側には抉り部を成形している。7 5 は横長剥片の主剥離面に調整剥離を施したスクレーパーである。頂部と一側面には自然面が残る。刃部は角度が急で様器状を呈す。

7 6 から 7 9 は旧石器時代の可能性がある石器である。7 6 は両側面に調整剥離を施す黒曜石の厚手の剥片で、打面は平坦打面である。先端部は欠損する。7 7 は安山岩の剥片で側辺に使用痕と思われる微細剥離が見られる。7 8 は黒曜石製の剥片で、2 面の剥片剥離がみられ、細石核の調整剥片の可能性がある。7 9 は黒曜石の剥片で側辺に調整剥離が見られる。打面は自然打面で端部にも自然面が残る。漆黒の石材で風化が強い。以下は写真のみ掲載しているもので 8 0 は黒曜石の楔型石器で自然面を残す。8 1 は黒曜石の石核である。

未図化のものを含めて出土石器を分類を試み、その数を表に示した。資料数が少ないためその値自体が有意なものかは不確かである。定型石器としては石鎌が多く、尖頭器、スクレーパーが各 2 点で続く。石鎌には小型の三角形鎌、深い抉りが入ったもの、薄手の三角形鎌があり、前二者は縄文時代早期に特徴的な形態である。2 点の尖頭器についても同時期のものと考えられる。スクレーパーは大型の安山岩製のもの 2 点のみで黒曜石の剥片を利用したものは見られない。剥片についても、整った形態のものは黒曜石にはほとんどなく、安山岩製に数点見られるのみである。また、安山岩製の剥片には縦長のものと横長のものがある。

石材は、黒曜石が 6 割、安山岩が 4 割を占め、比較的安山岩の比率が高い。また、黒曜石には牟田産と一般に呼ばれている表面のあばた状が顕著な円レキを母岩としているものと、腰岳産と呼ばれる角レキを母岩としたものがあり、自然面が残るものとの観察では両者ともほぼ同数であった。このほかに針尾島産とされる乳白色を帯びたものが数点ある。以上は肉眼観察のみの所見であり、原産地につ

遺物番号	出土位置	器種	石材	縦(cm)	横(cm)	厚さ(mm)	質量(g)
62	下部包含層	石鏃	黒曜石	1.01	1.02	0.33	0.24
63	SC03	石鏃	安山岩	2.61	1.56	0.3	0.77
64	上部包含層	石鏃	安山岩	1.92	1.17	0.28	0.49
65	SC03	石鏃	安山岩	2.1	0.83	0.26	0.46
66	SC03	石鏃	黒曜石	1.28	0.85	0.18	0.16
67	下部包含層	石鏃	安山岩	1.82	1.73	0.34	0.94
68	下部包含層	石鏃	黒曜石	2.51	1.7	0.46	2.03
69	下部包含層	石鏃	安山岩	2.23	1.76	0.49	1.6
70	上部包含層	石鏃未製品	黒曜石	2.7	1.61	1.76	3.57
71	SC03	石槍	安山岩	3.75	2.41	0.81	5.94
72	SC03	石槍	安山岩	2.24	1.24	0.74	1.88
73	SC03	抉入り石器	安山岩	3.08	1.64	0.89	4.24
74	上部包含層	スクレーパー	安山岩	7.41	4.95	1.1	44.1
75	下部包含層	スクレーパー	安山岩	8.6	3.04	0.92	26.82
76	上部包含層	2次調整剥片	黒曜石	3.15	1.9	0.56	3.02
77	上部包含層	U-Fla	安山岩	3.53	1.85	0.59	3.32
78	上部包含層	2次調整剥片	黒曜石	2.82	1.22	0.53	1.5
79	上部包含層	調整剥片	黒曜石	3.82	3.38	0.58	8.49
80	下部包含層	模型石器	黒曜石	4.28	1.3	0.85	4.09
81	上部包含層	石核	黒曜石	3.71	2.45	1.98	14.06

表2 石器組成

	石鏃	尖頭器	スクレーパー	抉入り石器	2次調整剥片	模型石器	剥片	碎片	石核	合計
上部包含層	1(0)	0(0)	1(1)	0(0)	1(0)	0(0)	7(0)	5(2)	1(チャート)	18(3)
SC03	3(2)	2(2)	0(0)	2(1)	0(0)	6(3)	6(3)	0(0)	0(0)	19(11)
下部包含層	5(3)	0(0)	1(1)	0(0)	1(1)	15(8)	15(8)	53(20)	4(0)	83(34)
合計	9(5)	2(2)	2(2)	2(1)	2(1)	28(11)	28(11)	64(25)	5(チャート)	120(48)

() 内は安山岩製の数。他は1点のチャートを除き黒曜石。

いても厳密なものではない。2次調査において出土黒曜石の螢光X線による化学組成分析が行われ、古里海岸?、牟田産という分析結果が表れている。

IV 終わりに

今回の調査では、旧石器時代後期から中世にかけての遺構遺物を検出した。

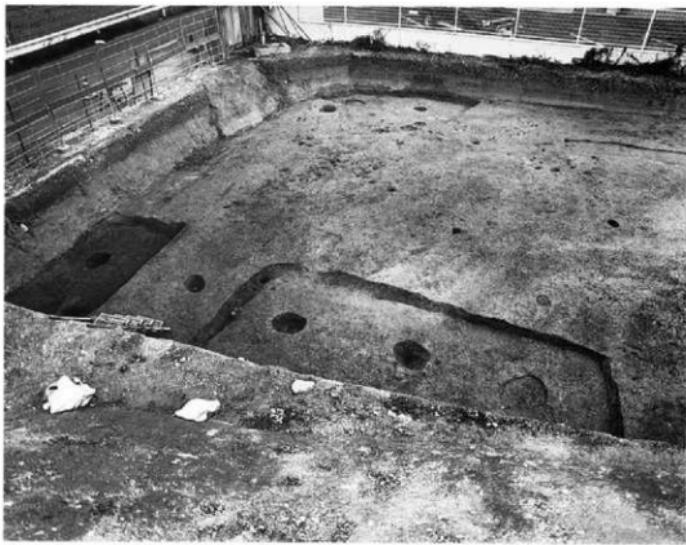
旧石器時代については明確な遺構、遺物包含層を検出するに至らなかったが周辺のローム層が残存する部分等に存在する期待がもたれる。縄文時代については、下部包含層の遺物が早期を主体とするものと考えられ、またSC02出土の土器が阿高系ものと考えられる。2次、4次調査において、落とし穴、埋設土器(埋甕)が出土しており、小規模ながら連続とした営みがあったことが伺われる。

古墳時代については3棟の堅穴住居跡を確認した。いずれも川土器から6世紀後半代のものと考えられる。2、4次調査で検出された住居跡群の広がりが確認できた。緩傾斜面を利用した集落が丘陵沿いにさらに広がると考えられる。そのうちSC01は、カマドおよびオーバーハングする壁構など4次調査と同様の特徴を有している。これがオンドルと呼べるものか、この場で判断する材料を持たないが朝鮮半島との関わりを視野に入れることは意義あることであろう。その際57のような窓の底部は注目される。

古代については、遺物のみの出土であるが、4次調査で古代の掘立柱建物群が確認されており、それらに関連するものと考えられる。中世の遺物は少なく、周辺に集落等が営まれていたと考えられる。大規模なものではないかもしれないが、輸入陶磁器を持つことは注目される。



(1) 調査区全景（西から）



(2) 住居跡群（北から）



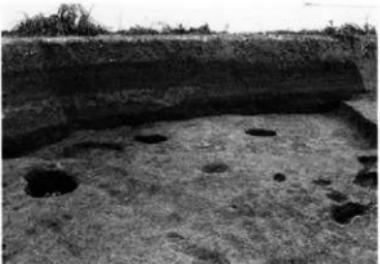
(3) SC02 (南から)



(4) SC03 (北から)



(5) SC01南半（東から）



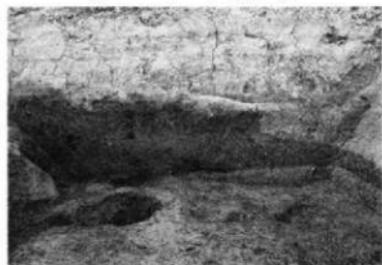
(9) SC02土層



(6) SC01カマド（東から）



(10) SC03土層



(7) SC01土層



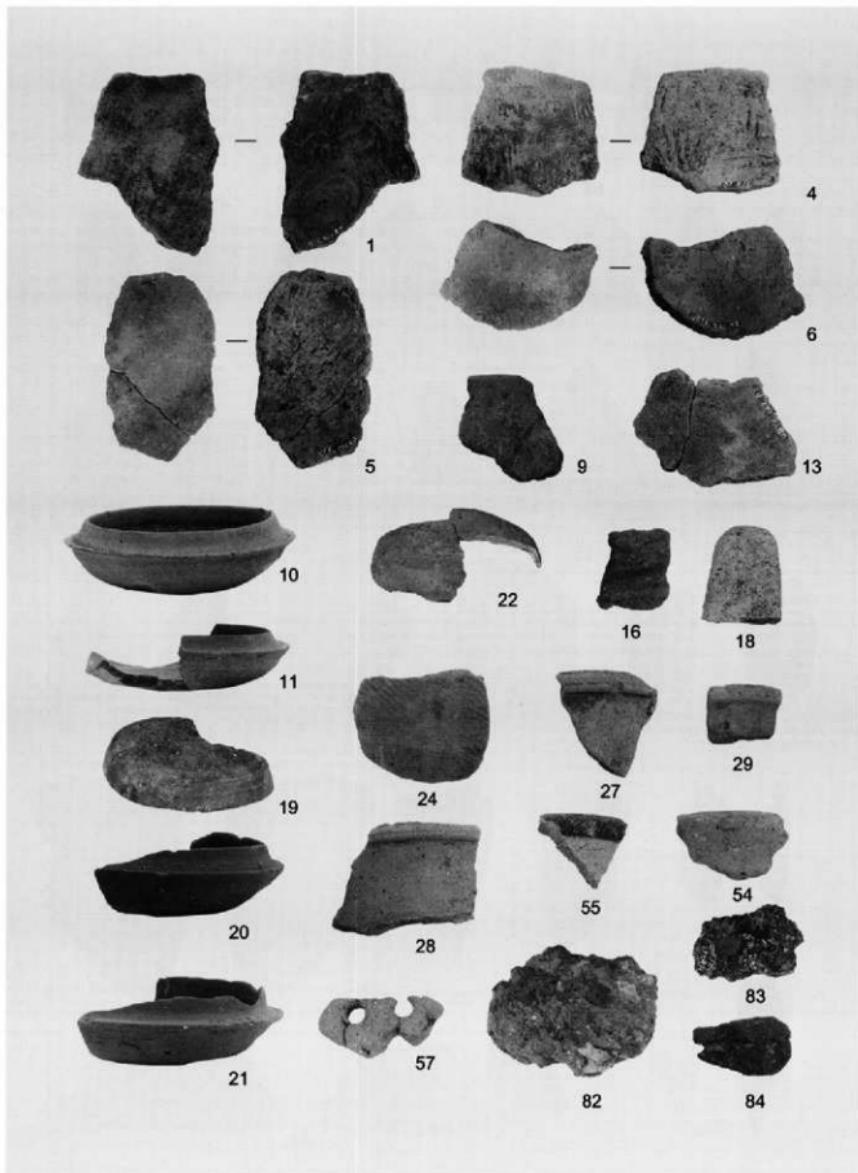
(11) 下部包含層遺物出土状況



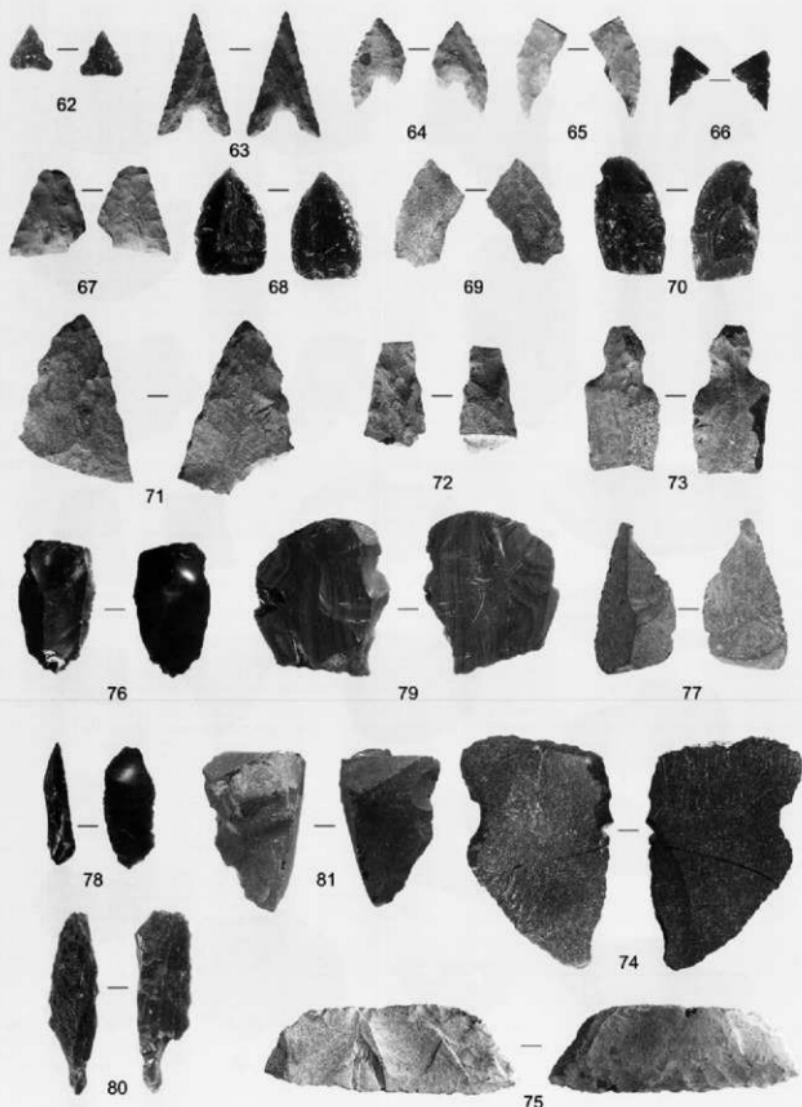
(8) SC01北半（東から）



(12) 作業風景



出土遺物1



出土遺物2

外環状道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書16

梅林遺跡4

—第6次調査—

福岡市埋蔵文化財調査報告書
〈第739集〉

編集・発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1
平成15年3月14日
☎092(711)4667

印 刷 株式会社ハザマ印刷
福岡市南区那の川1-20-23